

九月の雷雨(1)

フリード・ランペ著
松川 弘・訳

(平成26年9月10日受付)

Septembertwitter (1)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 10, 2014)

午後四時頃、気球はオスナブリュック近郊の空を上昇した。静かな青空をゆるやかに滑る気球に、白く丸いきれいな雲が並走し、眼下には緑の牧草が限りなく広がっていた。ペンコック氏は、気球でドイツからイギリスに飛行する勇氣があるかどうか、友人のハムステッドと賭をした。そして彼は今、本当に気球の吊り籠の中にいた。彼の娘である気丈なメアリーと操縦士が彼のかたわらに立ち、彼らはみんな地上を見下ろしていた。ペンコック氏は、長い望遠鏡をのぞいて「川沿いに町が見えるぞ」と言うと、その望遠鏡をメアリーに渡した。メアリーにも町が見えた。牧草地と茶色の川にはさまれた小さな町だ。橋と港、古い堤防に生い茂った暗緑色にやわらかく輝く教会の塔の屋根やドッグの中の黒い船、煙突をうしろに倒して橋を通り抜ける白い遊覧船、岸辺の墓地のちっぼけな十字架と墓石。牧草地はまわりを小さな運河や支流で取り巻かれ、運河には茶色の帆の白い小舟が浮かんでいた。午後の光の中ですべてが静まり、動きを止めていた。この空の上は涼しく、明るく、大気は軽やかだった。メアリーが「平和そのものね。みんな牧歌的な暮らしをしてるみたい」と言うと、ペンコック氏は「上からだそう見えるだけの話さ」と応じた。

確かに上からそう見えるだけのことだろう。なぜなら、下界は涼しいどころか、風の風いだ蒸し暑い晩夏の午後だったからだ。そして、上からだといえそう小綺麗に見える川沿いの聖エギディア墓地には、暑そうな黒い服を着た女がひとり、墓の前のベンチに腰を下ろしていた。黒髪の青白い顔をした大柄な女で、墓と咲きほこる花を見つめた

り、地面をのぞき込んだりしていた。墓地の園丁でもある年老いた管理人が、新しい墓穴を掘っていた。大きな黄色い麦わら帽子をかぶった、この鋭い灰色の眼の快活な老人は、園丁の官舎に向かって呼びかけた。「メータ、アンニ、こっちへ来てごらん、気球だ。」中洲で揚げるつもりで風を作ろうとしていた娘たちは、走り出てきて、気球を一瞬だけ見ることができた。陽光を浴びて金色に輝く茶色の球がおだやかな青空にのんびり漂い、木々の梢の背後に姿を消した。

「なんだか、急にお腹がすいてきちゃった」と、メアリーが言った。「この新鮮で涼しい空気のせいかしら。」彼女は、肩にかけていた革の袋からチョコレートを取り出すと、かじり始めた。「もうそれほど時間はかかるまい、海が見えてくるだろう」と、ペンコック氏は言った。「もう見えますよ。」と、操縦士が応じた。確かに、緑の牧草地の背後の地平線のはるか彼方に、細いおぼろげな水色の筋が光っていた。だが、洗面の操縦士は、この筋ではなく、白や鉛色に変わり始めた空の一角を見つめていた。今日はそのうち雨になるのだろうか？

古い町の蒸し暑い晩夏の午後は花盛りで、風が風ぎ、底に重苦しく鬱積していた。庭々は次第に濃密に合生し、草が高く生い茂り、あずまやの闇の中の空気は重苦しさを増していた。赤いフラシ天の家具が置かれかび臭いカーテンの掛かった部屋は、ほのかに金色に光っていた。窓台に置かれた鉢の中の濃く冷たいミルクは、乳脂で黄色くなって

いた。食料貯蔵室のハムやソーセージにはアオバエがとまり、地下室の木の棚からリンゴの香りが漂ってきた。下手くそなピアノの音が、開いた窓から死んだように静かな夏の通りにこだまし、聖エギディア墓地の供花はその頭をだらりと垂らし、大きな蝶がその上を物憂げに飛び回っていた。外堀の白鳥たちは穏やかに滑るように移動しながら、冷たい茶色の水を飲んでた。白い遊覧船が川を下り、中洲の牧草地では、黄色い煙突が草の間を動くのが見え、外輪翼のざわめきが聞こえていた。子供たちが風を揚げるのはこんな時だ。彼らはひもを握って中洲に立っていた。風は青空高く穏やかに漂い、長い紙の尾だけがあちこちに揺れていた。兵士たちが中洲で教練していた。牧草地と川に号令や小銃の発射音が響き、ドッグからハンマーの音がうつろにこだまし、水泳場からは絶え間なく金切り声が聞こえていた。

午後、市民公園のスイス館の前に腰を下ろしてコーヒーを飲み、ビクトリア湖や牧草地、木々、岸辺にたたずむニンフやトリトンの苔むした彫像を眺めるのに恰好の時だ。ヴェールビーアの軍楽隊が勇壮なマーチやワルツ、オペレッタのメドレーを演奏していた。楽隊員は襟に金モールのついた青い制服を身につけ、トランペットが陽光にきらきら輝いていた。軍楽隊が演奏をやめるとしばらくは静かだったが、またテーブルの間から人々の賑やかなおしゃべりが始まり、木々の上を一羽の大きな黒い鳥が穏やかな青空に飛び去り、遠くから汽笛が聞こえてきた。

そんな時、二日前にこの市民公園の樹皮葺きの園亭のそばで起きたあの恐ろしい殺人事件を、人々が突然思い出すこともあるだろう。「マリーちゃん、あなたは前にあの人の授業を受けたことがあるんじゃない?」「ああいやだ、受け持ちだったのよ」被害者は、マリー・オルフェルスという若い女性教師だった。犯人はまだ見つかっていない。気分をすっかり台無しにされた人々は、急に家に帰りたくなった。「でも、あの園亭のそばは通らずに、回り道しましょうね。」「気の小さい人ね。もう何も起きないわ。私も一緒なのよ。」「あの園亭の近くではいつも何かが起きる。不吉な場所よ。気味が悪いわ。銀行家のリュエデルスさんもあそこで首を吊った。あんな園亭は取り壊すべきよ。それが一番だわ。」しかし、ヴェールビーアの軍楽隊がまた『マリー・ウィドー』のポプリーを演奏し始めると、人々は次第にあの不気味な事件のことを忘れていった。

「それじゃ、顔を描かなくてはね」と、アンニが言った。「あなた描いて。私は駄目。」「うまくやるわ。」メータはそう言うと、学校の鞆を引っかき回して小さな道具箱を取り出し、開いた蓋に唾をつけて絵の具をかき混ぜた。

「ドーラ、どんな顔がいいかしら?」

「放つといてよ。」ドーラは開いた窓辺に座り、一枚の紙に見入って、時折顔を上げ、唇を少し動かしていた。「どうしても暗記できない。もちろん笑い顔よ。風はいつだって笑ってるわ。お日さまみたいにね。」

「じゃあ、笑い顔を描いてみて」と、アンニは言った。

「泣き顔はどう?」と言って、メータは口をへの字にして黒い瞳で悲しげにアンニを見据えた。「泣き顔は駄目よ。」

「いいことを思いついたわ。」メータはそう言うと、素早く一つの顔を描きあげた。それは、半分が喜び半分が悲しんでいる顔で、一方の眼は丸くおだやかに笑い、もう一方の眼からは大きな涙がこぼれ落ちていた。口の半分は上向きに反り、半分は苦しげに垂れていた。

「泣き笑いの顔ね」と、ローラは叫んで、興奮して部屋の中をはね回った。「ドーラ、見てよ、泣き笑いの顔よ。すてきね、メータ。」メータはお構いなしに描き続けた。太い眉は丸く、頬は赤く、髪の毛は黄色で放射状に、鼻は青くしてみた。ドーラも退屈して、机のそばにやってきた。

「ふーん、本当に滑稽ね、でも、ちょっとおとなしいわ。」そして、また窓辺に座って、誰にともなく言った。「公妃はイタリア生まれで、この北国では居心地が悪く、重いホームシックにかかって、若くして亡くなったということです。公爵は、彼女のために、墓標に次のようなラテン語の碑文を彫らせました。

澄んだ空気と青い海、

彼女はそれを忘れなかった。

死んで初めて健やかに、

彼女は故郷に帰ることができた。」

大柄な黒服の女は、墓前から歩み去ると、ゆっくり園丁の方に歩み寄った。「私の夫の墓のツゲの木がまた踏み倒されてるわ。」

老人は、ショベルを置いたままで墓から這い出し、彼女について行って、被害を吟味した。「ひどい子供たちだ。また私の二人の孫の仕業です。小さな足跡があるでしょう。墓地ではどう振る舞うべきか、一度教えてやらなくては。」「そろそろそうしてもらわなくてはね」と、ホルマン夫人は言った。「あの子たちは私のところへ来たばかりなんです」と、祖父は言った。「去年の秋に娘が死にまして、子供を三人、家に引き取りました。ふだんは私を喜ばせてくれる良い子たちなんです。よく手伝いもしますしね。ドーラは料理を作り、台所と聖具室の管理も引き受けてくれています。でも、墓地でこんなにはしゃぎ回られると、困りものです。あれ、あの子たちがこちらに、風をもってやってきます。できたようですね。あの二人の娘はとても器用なんです。私に風を見せたいんだな。」

メータが先に立ち、顔が早く乾くように風の頭を振り回

していた。アンニは末端に色とりどりの巻紙がついた風の尾をもっていた。祖父のそばに見知らぬ女性がいるを認めて、彼女らは立ち止まった。その青白い顔の女性は、黒い目で彼女たちをまじまじと見つめていた。大柄で、夏だというのに黒服を着て、日の光を浴びている。

「こっちに来て、見てごらん。お前たちはまた、墓地ではしゃぎ回って、ホルマンさんのきれいなお墓を踏みにじったね。いけないよ。」二人の少女はふさぎ込んでしまった。メータは、風の頭を垂らし、つま先で地面に小さな穴を掘っていた。アンニはおとなしく祖父を見つめていた。あの陽気なお祖父さん、ほんとに怒っているのかな、少しは微笑んでくれないかな？

「許しておやりなさい」と、ホルマン夫人が言った。

「お前たちにはもっと厳しくしなくてはな」と、祖父が言った。

「もう、ホルマンさんにご迷惑をおかけするんじゃないよ。」

子供たちはうしろに下がり、祖父はもう一度振り返って言った。「お許し頂けますか？ 子供たちには、ここは格好の遊び場なんです。田舎の家には、大きな庭もあったんですが。」

「構いませんのよ」と、ホルマン夫人は言って、夫の墓のところに戻ると、両手をぐったりと膝に載せて、ベンチに腰を下ろした。

「風を見てもらいたかったの」と、メータは言って、風の頭をおずおずと持ち上げ、その顔を見せた。

「泣き笑いの顔よ」と、アンニが言った。

祖父は、思わず吹き出しそうになる感情を抑え、ホルマン夫人の方を見やって、「お前たちの思いつきは、確かにすばらしいよ」とだけ言った。それから、子供たちをやんわりと押しのけて、彼は言った。「墓地の外へ出て、もう少し遊んでいなさい。でも、夕食に間に合うように戻ってくるんだよ。」

「この風を揚げてみたいの。」

「風がないし、これから雷雨にならないとも限らないよ。」

「出かけましょう」と、メータが言った。「お祖父ちゃん、この風、乾くまでここに少し置かせてくれない？」

「ああ、いいよ。」

少女たちは走り去った。「お先に！」アンニはそう言うと、メータの腕を軽くたたいて走っていった。「言ったわね！」と、メータは叫んで、彼女の後を追った。墓の間を駆け抜け、板石の上を飛び越え、白い教会のそばを通り過ぎて、彼女たちは墓地の門から出ていった。

静かになった。祖父はまた墓の中にはいると、ショベルで掘り出した。ショベルがときおり石に当たる音が聞こえ

た。ホルマン夫人は、物思いにふけりながらベンチに腰を下ろしていた。ドーラは、開いた窓辺で、文章を相変わらず誰にともなくつぶやいていた。祖父のミツバチー裏の壁の片隅に箱が三つ置かれていた――が、墓に生い茂りだらりと垂れた晩夏の花の上をブンブン飛び回り、大きな蝶が十字架の上に疲れた羽根を休め、川の方から、造船所のハンマーの音がうつろに響いていた。そのとき、教会のオルガンがかすかにうなり始め、甘美で厳かな音色が墓の上をただよった。

「できたみたい」と、ドーラが言った。

「それじゃ、聞かせておくれ。」祖父は、墓の中に直立して、両手をショベルの柄の上に乗せた。「まあ、この顔を見てごらん」と、彼は言った。「あの子たちが風をここに置きっぱなしにしたのね」と、ドーラは言った。「持って帰らなくちゃ。」「そのままにしておいてくれ。まだもう少し見ていたいんだ。さあ、文章を暗唱してごらん。」風はそこに置かれたままで、ドーラが文章を朗読している間、祖父はときおりその顔をのぞき込んでいた。「声が大きすぎる」と、祖父は言うとき、ホルマン夫人の方を見やった。ドーラは、膝に両手をついて、祖父の方にかがみ込んだ。「それじゃ、もう一度。この教会の建設は、すでに九世紀に始められました。もともとここには、聖エギディウスが創設した僧院が建っていました。彼は、この地方にキリスト教を広めるために、遠方から僧たちを連れてやってきたのです。そして、川のほとりに彼はこの土地を見つけました。ここには、長くのびた高い砂丘があり、川をうまく横切ることができるので、漁師たちが入植していました。聖エギディウスの言葉は正しく……」

「うん、悪くないね」と、祖父は言った。「なめらかだが、もう少し簡潔にしくちゃな。」

「分かってるけど、すぐには無理よ。」

「そりゃ、そうだね。」

メータとアンニは、教会の中につま先立ちでこっそり忍び込み、ベンチの陰に身を隠して、聞き耳を立てた。高い、狭い、ほこりだらけの窓を通して、漆喰で白く塗られた裸の壁と床に、白っぽい陽光がざらざらと照りつけていた。分厚い黒い聖書が載った祭壇の布は深紅色に光っていた。オルガンのところには、メッツラー氏が鍵盤に身をかがめるようにして座っていた。こちらからは、彼の幅広い黒い背中しか見えなかった。誰かが自分たちの背後でドアを通り抜け教会に入ったのに、子供たちは気づかなかった。それは、丸く若々しい明るい顔をした男で、鼻筋が通り、唇が赤く、茶色の夢見がちな眼が、音楽の美しさにしっとり輝き始めた。

オルガンの音色は次第に高まり、みなぎり、うごめき、訴えかけるように、甘く誘惑するように響いた。メータは、腕と頭を前方のベンチにもたせかけたまま、夢見心地で音の洪水に巻き込まれ、嘆きの赤い陰鬱な海に連れ去られ、雷雨が生んだ大波に見舞われた白鳥のように、黒く分厚い大波に身を浸していた。

その間も、ドーラは朗読を続けていた。「公妃はイタリア生まれで、この北国では居心地が悪く、重いホームシックにかかって、若くして亡くなったということです。公爵は、彼女のために、墓標に次のようなラテン語の碑文を彫らせました。

澄んだ空気と青い海、
彼女はそれを忘れなかった。
死んで初めて健やかに、
彼女は故郷に帰ることができた。」

「その通りだ、ドーラ」と、祖父は言った。「澄んだ空気と青い海、奴はそれを忘れないよ。」

「本当にそう思う？ お祖父ちゃん、私ときどき、あの人がいなくなるんじゃないかと思うことがあるのよ。」

「奴は無責任男だからな」と、祖父は言った。

「心配だわ。今、トスカ号が港に停泊してるの、前にあの人が乗ってた船よ。今晚、ジェノバに戻るんだわ。昨日、あの、甲板長と一緒にだった。」

「まあ、まあ」と、祖父は言った。「今日のところは、まだ大丈夫だろう。」

メータはベンチにもたれて涙もなくむせび泣き、アンニは身をかがめて彼女を揺すぶっていた。「一体どうしたの？」メッツラー氏は演奏をやめ、立ち上がり、体を回し、聖歌隊席の手すりにもたれて、青白い顔と小さな黒い目ではんやり少女たちを見下ろした。

「メッツラーさん」と、メータは彼に向かって叫び、おずおずと微笑み、またしゃくり上げた。「なんて悲しい演奏なの、なんて悲しい曲なの。」

「悲しくて、しかも美しい」と、少女たちの背後から一つの声が上がった。少女たちが振り向くと、そこに一人の男が立っていた。メッツラー氏も、硬直し青ざめひどく動揺して、その男を見つめた。

「何かご用ですか？」と、彼は小声でたずねた。

「あなたを警察に連行したい」と、その男はおだやかに微笑みながら言った。「それは、あなたがここで恥づかしいほど美しい、犯罪的に美しい演奏をしているからだ。よかったら、ここに下りてきて話をしませんか。」

「分かりました」と、メッツラー氏は言って、重い足取りでゆっくり聖歌隊席から螺旋階段を下りてきた。少女た

ちもメッツラーおじさんとまだ話をしたかったが、見知らぬ男がおじさんを独り占めしたのを見て、静かに教会から出て行った。「もう風が乾いた頃ね」と、アンニが言った。少女たちは、あの泣き笑いの顔を取りに墓地に向かった。もうそろそろ中洲に行かなくては。「どうなるか分からないよ」と、祖父は言った。「蒸し暑いし、太陽も隠れそうだ。雷雨があるかも知れない。風も止んでいるしね。」

「それでも、揚げてみたいわ」と、少女たちは言った。

「その泣き腫らした顔はどうしたの？」と、ドーラは尋ねた。

「何でもないわ」と、メータは言った。

「いや、すばらしかったよ」と、その男は言った。「散歩の途中ここを通りかかったとき、午後に何度かあんたの演奏を聴いたことがある。でも、今日ほどすばらしくはなかった。あんたが弾いていたのは、何という曲なんだい？」あの音色を思い出してもう一度味わっているかのように、彼の赤い唇は輝いていた。

「あれですか。あれは自作の幻想曲で、詰まらぬ曲です。」

「あんなのを作曲できるのか？ 書き留めておかなければ。並はずれた作品だよ。音楽のことは少しは分かる。自宅にハルモニウムがあるし、少しは弾けるんだ。もちろん、まったくのディレタントだがね。でも、あんたの演奏が並はずれていることぐらいは分かるさ。他人が聴いたら不愉快になるかも知れないが、こんな曲を教会で聴けるなんて思いもよらなかったよ。」

「感想をお聞かせ願えますか？」と、メッツラー氏は尋ねた。

「ああ、あれは断じて敬虔な教会音楽じゃない。違う。情熱と血潮が込められているのは確かだが。しかし、くだらない話は止そう。実を言うと、あんたに一度家に来てもらって、演奏を聴かせてもらいたいんだ。自分のことを分かってくれる人間なんてめったにいないよ。そうは思わないかね？」

「まあ」と、メッツラー氏はためらいがちに言った。「時間さえ許せば。」

「午後に二、三時間、くつろいで雑談して、妹の煎れてくれるコーヒーを飲み、それからハルモニウムで何か弾いてもらえればありがたいんだ。この場で日取りを決めておこう。木曜の午後はどうかな？」

「ええ、多分行けると思います。」

「それじゃ、五時頃来てくれたまえ。いいかな？ よし、私はルンゲ、クリスティアン・ルンゲという者だ。外濠の六七番地に住んでいる。覚えていられるかな？ 書いた方がいいね。」ルンゲ氏はメモ綴りを取り出して、住所を書き留めた。その間にメッツラー氏は尋ねた。「あなたが、

あのすばらしい秋の詩を書かれた詩人のルンゲさんなんですか？」

「ああ、私そのルンゲだ。」親しげに笑いながら、彼はメツラー氏にメモを渡し、手を差し出した。「それじゃ、木曜に。あんたの名前を聞いてなかったね。メツラーだっけ？ それじゃ、さようなら、メツラーさん、木曜ですよ、そのときは音楽をそれこそ心ゆくまで味わいたいものだ。」

もう赤い服を着ても平気だわ、とホルマン夫人は思った。でも、それで何かが変わるわけじゃない。全部終わったのよ。そのとき、鍵のことが突然彼女の心をかすめた。彼女はハンドバッグを体に押し当て、あわてて中を探した。鍵はなかった。母が今日戸棚に近づいたのだろうか、その恐れは十分あった。

突然、彼女は立ち上がり、急いで墓地の門に向かった。管理人に挨拶することも忘れていた。黒い影のように、彼女は教会の白壁のそばを通り過ぎていった。

「見てごらん。きっとまた戻ってくるよ」と、祖父は言った。「あの人、本当にぼけてしまったのね」と、ドーラは言った。「毎日、お墓のそばでしゃがみ込んでるなんて。」

「そのときは、可愛い少年も一緒だよ」と、祖父は言った。「チビのマルティンさ。彼女はきっとやっこさんをここへ引っ張ってくるよ。あの子も墓のそばで座り込むことになる。それじゃ、朗読を続けてくれ。」

ドーラは続けた。「とくにオルガンに注目して頂きたいと思います。このオルガンは一六四八年製で、三十年戦争終結にたいする感謝の念から、ある金持ちの商人により寄贈されたものです。当地方では最高のバロックオルガンで、製作者のザムエル・ビュットナーはこれを……」

チビのマルティンは、今日も、母と墓地に行かねばならないという強制から逃れるのに一苦労した。食後すぐ、母は彼に向かって、今日も一緒に来なさいといった。「お前はお父さんのことをほとんど考えてないね。もう忘れてしまったの？ 物忘れがひどい子だこと。」だが彼は、バスタオルと水泳パンツをかかえて、うまく家を抜け出すことができた。渡し船で川を渡った彼は、ティーママン水泳場の栈橋に腰掛けて、ディッキー・ブレントと彼の仲間たちの方をこっそり盗み見ながら、脚をブラブラ揺らしていた。彼は、あの陽気で立派な父のことを、水泳場に来るととりわけはっきり思い出すのだった。ここで彼らは、よく一緒に泳いだ。父が彼に水泳を教えたときは傑作だった。「さあ、始めて。ごまかしちゃ駄目だぞ。」父は彼の隣にいて、力強い腕を伸ばしてマルティンをその上に載せ、陸上で教えた水泳の動きを練習させた。彼は、マルティンが気づかぬ

うちに腕を引き、マルティンはとうとう一人で泳げるようになった。水中で自分を運んでくれたあの力強くたくましい腕、その同じ腕にささった小さな棘のことを、マルティンは思い出さずにはいられない。庭で働いていたとき、セイヨウスグリの茂みで、ごく小さな棘が父の腕に刺さったのだった。青い血管の筋が腕に走り、心臓に達して、腕が突然腫れ上がってしまった。そして、「何でもないと、ひどくなったら医者に診てもらおうから」と、父が笑ったとき、あの小さな棘は、力強く明るく元気な一人の男をすでに倒していたのだ。夏、客間に置かれた棺に彼が横たわったとき、彼が愛していた外の庭では花が満開だった。

ディッキー・ブレントは砂地に腰を下ろし、彼を取り囲むように仲間たちが座っていた。ディッキーは真っ黒に日焼けし、肩幅が広く、鉄の筋肉と囚人のように短く刈った固く丸い頭を持ち、目つきが鋭かった。「また風の季節がやってきた。去年と同じように、ここであの小さな悪ガキがまた悪事を働くんだ。昨日、奴は子供たちの風の糸を切ってしまった。奴はとりわけ弱い少女たちによく手を出す。あの臆病者は背後から彼女たちに飛びかかり、風糸を切る。少女たちが叫び声を上げると、奴は歓声を上げる。この風のエミールがお前さんたちをあの卑劣漢から守ってやるんだ、ありがたく思え、とさ。奴は頭がおかしいか、まったくのげす犬に違いない。だが奴はまたずる賢くてなかなか捕まらない。お巡りがあいつの犯行現場を押さえるまで、俺たちは長い間待たなければならないのか？（仲間たちの笑い）そうだ、俺たちは長い間待つことができる。いや、俺たちがこの事件を引き受けるんだ。それじゃ、今からこの一帯を見張るんだ。風をもった子供たちを見かけ、怪しいものを目にしたら、すぐ仲間を呼び集めるんだ。お前たちは、風のエミールがどんな奴か、みんな聞いてるだろう。黄色のバサバサ髪で、青いセーターを着て、茶色いピロードのズボンをはいてるんだ。奴は今日、もう姿を見せているかも知れない。」

「でも、風は全然揚がってないよ」と、とんがり鼻の少年が異議を申し立てた。「風もないし。」

ディッキーは飛び起きて、辺りを見回した。「確かに、完全な風だ。」ディッキーの鋭い視線は、空を探るように行き来した。晴天ではなく、空は白々と輝きながらその色を変えていた。川は銀色に光り、地平線の背後、堤防や茂み、わら屋根の背後で、空が暗褐色に圧縮されていた。「分からんな」と、ディッキーは言った。するとまた突風が吹いた。風が起こったとき、ディッキーは二人の少女が中州を歩いているのを見た。仲間たちはみな立ち上がり、ティーママン水泳場の板塀越しに風を手にした二人の少女を見ようと背伸びした。「分からんな」と、ディッキーは言った。「風のエミールは今日もお出ましか。」

「風だわ」と、メータが叫んだ。「やっと風が吹いてきた。」彼女は風の頭を高く掲げて叫んだ。「始めましょう。」アンニは、少し離れて紐と糸巻きを手にして立っていたが、草原を疾走し始めた。突風が風の泣き笑いの顔に当たり、風は飛び上がって、乱れた曲線を描きながらあちこち飛び回り、風の尾が揺れながら空中を踊り、舞い上がっていった。「さよなら、泣き笑いの顔。」

「もう顔が見えなくなっちゃった。残念ね」と、アンニは言った。

「鳥たちには見えるわよ」と、メータは言った。

「鳥ならね」と、アンニは言った。

そのとき、銃声が中洲にこだまして、うつろな静けさを破った。少女たちは、堤防のそばで兵士たちが教練をしているのを見た。彼らは、さえない青い制服を着ていた。

「お願いだから、ここから離れて」と、アンニは言った。「もっと、ティーマン水泳場の方に行ってよ！」

「弱虫ね」と、メータは言った。「実弾射撃じゃないわ。空砲よ。」

ジョニー・シュテークマンは、ディッキー・ブレントと並んで砂の上に腰を下ろし、盛んに彼を説きつけていた。「あいつは本当にいい奴なんだ。」

「奴はいつも不満げに見えるぜ」と、ディッキーは言った。

「あいつは去年、父親を亡くしたんだ。」

「まあ、連れてこいよ。」

ジョニーが呼んだとき、マルティンは泣き笑いの顔が不安定に上昇するのを見ていた。ジョニーは、彼の方に歩いていった。

「おい、こっちへ来いよ、ディッキーが君と話したいんだって。」

「それじゃ、お前さんは仲間に入りたいのか」と、ディッキーは尋ねた。彼は脚を組んで座り、日焼けした骨張った指の間から砂を漏らしていた。マルティンはディッキーの堅くて丸い、短く刈り込んだ頭を見つめた。仲間たちは彼を取り囲んで座り、無言でマルティンを見つめていた。

マルティンは後ろめたげにうなずいた。

「仲間になりたいんだ。」

「ああ、そう言う奴はかなりいる。だが、必要なのは選りすぐりなんだ。お前さんはちょっとヒーローには見えないぜ。大した奴もかなりいる。笑い事じゃないぞ。あのマリー・オルフェルス的事件じゃ、もう散々笑いものになったんだからな。まったく馬鹿な話だ。」

「何か探り出したのか？」と、とんがり鼻のピップスが尋ねようとした。

「黙るんだ、ピップス」と、ディッキーは暗い声で言った。

「俺が釈明しなけりゃいけないのか？ お前はここんとこ生意気だぜ。見ろよ、上空を風が飛んでるだろう。行って、風のエミールが来ないか見張ってるんだ。あの板塀のところで、ちょっと見張りに立ってろ。お前さんにはお誂え向きだ。」

ピップスは、高慢なとんがり鼻を真っ赤にして、もう何も言わず、おとなしく板塀の方に歩いていった。

「急げ、急げ」と、ディッキーは彼に向かって叫んだ。それから彼は、マルティンに尋ねた。「殴り合いができるか？」

マルティンは悲しげに首を振った。

「取っ組み合いは？」

「できない。」マルティンはぐっとこらえた。

「でもこいつは本当に泳ぎがうまいぜ」と、ジョニーが言った。

「ほう、それじゃ見てみよう。」ディッキーは身を起こすと、ジョニーから腕時計を取り上げ、棧橋の上に立った。マルティンは浜辺に出ざるを得なかった。「四番目の柱のところまで、三往復するんだ。始めろ。」

マルティンは必死で灰色の水の中に飛び込み、やせた腕を前に突き出した。突風が波を起こし、黒いタグボートが縦揺れしながら黒い煙を上げて通り過ぎた。むこうのドックからはハンマーの音がうつろに響き、中州からは銃声が聞こえていた。空は冷酷なほどに白く、ディッキー・ブレントは棧橋に突っ立って、腕時計を見て小声で数えていた。タール厚紙の屋根がついた緑色のバラックのドアを開けて、大きな白い前垂れをつけた太ったティンマーマン氏が姿をあらわし、様子を眺めた。

それからディッキーが言った。「一分半が過ぎた。ほら、ジョニー、時計だ。駄目だな、お前のマルティン・ホルマンは御免被るよ。いや、これじゃ意味がない。俺たちももっと選り抜きが要るんだ。これじゃ駄目だ。」彼はマルティンから離れると、棧橋を下り、ティンマーマン氏の方に向かった。「スペクラティウス五個」と、彼は言った。

「先週ずっとお前さんは代金を支払ってないぜ。」

「誓って、支払うよ。」

「誓って、だって」と、ティンマーマン氏は笑った。「おい、おい、誓って、とはうまく言ったな。」

「俺が、誓って、と言ったんだから、その通りさ。」

「ほう、そうかい」と、ティンマーマン氏は言った。「あの可愛いホルマン少年をいじめて、それが英雄的行為と言えるのかね。そんな奴にスペクラティウスはやれない。御免だね。」

「それじゃ、奴だけスペクラティウスを食って、くたばるがいいさ」と、ディッキーは言った。

「あの子は去年、父親を亡くしたんだ。父親は水泳選手

だった。彼が生きてたら、お前たちはあの子をいじめることはできなかったはずだ。お前たちはしたたかぶちのめされていただろうよ。増長したガキどもの鼻をあかすことくらい、彼には朝飯前だ。」

「そうは問屋が卸さないさ。蛇と一緒に泳げるあんたの汚い水泳場を、俺たちは当てにしてるんだよ。」

「罰金はたったの十五マルクだ。」

「ふざけるな」と、ディッキーは言った。

「さらに七十ペニヒ」と、ティンマーマン氏は後ろから叫んだ。

ディッキーは、感心して彼を見つめている仲間たちのところに戻った。どえらい奴だ、ティンマーマンからまた一本取ったんだから。

「カリジウスのとこへ行ってくる。」

彼は板塀の方に向かった。「ピップス、風のエミールが来ないか、よく見張ってるよ。やむを得ないときは、すぐ知らせるんだ。俺はカリジウスのとこへ行ってる。」それから彼は板塀によじ登った。

「こら、水泳パンツのままじゃ駄目だってことくらい、知ってるだろ」と、ティンマーマン氏が上から叫んだ。

「当たり前だ、ティンマーマンさん」と、ディッキーは板塀に馬乗りになって叫び、上品に手を振り、板の向こうに飛び降りて姿を消した。

ドーラは台所に立って、昼食の食器を洗っていた。文章の暗記と暗唱に手間取ったので、今ようやく彼女はそれに取りかかったのだった。台所の窓は開いていて、彼女は洗い物をしながら墓地の方を見ていた。辺りは次第に暗くなり、ひどい突風がずっしりと垂れ下がった木の葉の塊を引っかき回した。祖父は急いで墓掘りの仕事をかたづけた。シャベルで掘り出された砂は大きな丸い山を作り、彼は墓の底面を踏み固め、側面を突き固めた。自分がずっと前から観察されていることに、彼は気づかなかった。ほこりに覆われた聖具室の窓から、小さな黒い目をした青白い顔がのぞいていた。メッツラー氏が、腕を背中で組んで身じろぎもせず立ち、新たに掘られた墓の方を見つめていた。彼の横の石灰の壁の帽子かけには、堅い黒い帽子がかかっていた。それからメッツラー氏は、熟考しながらあちこち歩き回り、突然帽子をつかむと、振り向いて教会を出て行った。

ドーラは、ロダーニ親子が墓地の門に入るのを見ていた。父と子である。黒い服を着てつば広のソフト帽をかぶったロダーニ氏は、アルベルトが引っ張る手押し車の脇を歩いていた。彼のところに自分からは行かない、とドーラは考えた。鼻持ちならない彼の方からこっちに入って来させるんだ。二つの新墓の飾り、金色の碑銘が入り磨きのかかっ

た黒い玄武岩と子供の墓用の小さな大理石の天使が、手押し車の上で揺れていた。天使はひざまずき、腕を膝で支え、巻き毛の頭を敬虔に上に向けていた。

「やあ、こんにちは」と、祖父は言った。彼は墓から這い上がると、天使の巻き毛を撫でた。「また戻ってきたんだね。」チョロひげを悲しげに垂らしたロダーニ氏は、黄色い顔をさらに曇らせた。「まだ奴を必要にしている者がいるっていうことさ」と、彼は叫んだ。「わしは違うよ。こいつにはもううんざりしているからね。」

「でも、楽だろうが」と、祖父は言った。

「別に楽をしようなんて思っていない。わしは芸術家だ。わしは自分の頭に浮かんだ素晴らしい思いつき、新しい思いつきを実現させたいんだ。ジェノバの墓地に行ってみるがいい。見事な墓がいっぱいだ。」

「わしはこれが可愛いと思うがね。」

「これはまがい物だ。わしをからかうつもりか。あんたの魂胆は見え透いてるぞ。あんたはわしに楽をする方法を教えるつもりなんだろう。」

「それは違うよ、ロダーニさん。」

「あんたもわしに反対なんだな。分かってるよ。みんながわしに反対するんだ。」

ロダーニ氏は、まだしなびた花輪が載っている新しい墓の盛り土に歩み寄った。「この墓の依頼を受けたのは誰なんだ？」

「ベッカーさ」と、祖父は言った。

「あんたは老獺だな。みんなをベッカーのところに行かせた、いや、連れて行ったんだろ。」

「とんでもない」と、祖父は気後れしたように言い、決まり悪そうにうつむいた。

「アルベルトが見てたんだ。アルベルト、あれはいつだったかな？」

アルベルトは落ち着いていた。彼は足を手押し車の上に乗せ、腕を膝で支えて頬杖をつき、穏やかな南欧的な眼差しでぼんやり二人の男を、さらに彼らを越えて向こうの方を見つめていた。彼の立ち姿はまるであの小さな大理石の天使みみたいだ。祖父はそう思ったに違いない。それからアルベルトは、暗いが口調よく言った。「木曜の午後だよ、父さん。」

「確かにベッカーとは親しくしている」と、祖父は言った。「一緒に学校に通った仲だからね。」

「ベッカーはもぐりだ。素人だ。でも、あんたたちは結束してる。わしはまたジェノバに帰りたいよ。まったくやり切れん。たくらみ、下劣な策謀が至る所にあるからな。訳の分からないことから手を引くんだ。あんたは墓の手入れをして、あの忌々しい蜜蜂が飛び回らないように気をつけてあげればいいんだ。そもそも、墓地で蜜蜂を飼うなんて、

そんなことをしてもいいと思ってるのか。あんたがわしを陥れようとしてるんだったら、墓地に蜜蜂の巣箱を入れている廉で、わしはあんたを訴えてやるからな。いたた。また始まった。いつもの菌痛だ。」

「勝手に痛がるがいいさ」と、祖父は静かに言った。

「父さん、こりゃどうしても歯医者にかからなくちゃね」と、アルベルトが言った。「この人は歯医者に行くのが怖いんですよ。」

「わしが怖いんだって。とんでもない。どうして実の息子にそんなことを言われなくっちゃならないんだ？ ああ、もう出て行くよ。とても我慢できない。」頬に手を当てて、ロダーニ氏は墓の間をよろよろ歩いて行った。空気は重苦しく、風が茂みを引っかき回し、だらりと垂れた花からうっとおしい香りが発散されていた。

「確かに、とても我慢できない」と、アルベルトは言った。「僕も行こう。」それから彼は、決まり悪そうに祖父の前に立ち、縮れ毛の頭をうなだれ、足で地面を引っかいた。「今夜、トスカ号で行きます。万事手筈通りです。こっそり逃げ出したいんです。でも、僕の口からそれを彼女には言えません。彼女はそれを聞いて激怒するでしょうから。そこでお願いなんです、彼女に、僕が行くとしたら今晚だと、言ってもらえないでしょうか。」

「可哀想に、ドーラ」と祖父は言った。

「ええ、自分でもひどいとは思いますが」と、アルベルトは言った。「でも、僕はまた海外に、イタリアに行きたいんです……」

「やあ、ヤン」と、カリジウス少尉は言って、ブッダ伍長の方を振り返った。「続けていてくれ、ブッダ君。僕はちょっと岸辺に下りてくる。」兵士たちは教練を続け、ディッキーと一緒に堤防に下りて斜面の背後に消えていく少尉を横目で見送った。彼らは岸辺の柳の茂みの脇に並んで腰を下ろした。カリジウス少尉は長い間無言で、ディッキーもあえて口を開かず、カリジウスのやせた腕を見つめていた。カリジウスは、関節が音を立てるくらい強く両腕を組んでいた。彼女が埋葬される当日も彼が欠勤しなかったことに、ディッキーはひそかに感心していた。

「ディッキー」と、カリジウス少尉は言った。「君には言うておかなくては。僕は出て行くよ。カメルーンへの転任を志願したんだ。十月には出発だ。」

「カリジウス少尉、あんた出て行きたいのかい？」と、ディッキーは叫んだ。

「ああ、もうここにはいたくない。決めたんだ。前々からうんざりしていたんだ。彼女が引き留めていただけなんだよ。でも、もうたくさんだ。」

「カメルーンか」と、ディッキーは言った。

「ああ、それが一番男らしいやり方じゃないかと思うんだ。この町にはもう我慢できない。この町の様子を見てみるよ。むっとして息苦しく、かび臭く、何も起こらない。時間だけが流れている。この静けさ、兵隊向きじゃない。」ディッキーは目を上げ、灰色の河越しに町を眺めた。町は静かに、息を殺して横たわっていた。木々は繁茂して動きをとめ、川沿いの聖エギディア墓地の暗緑色の糸杉は、脅かすように白々と輝く空に向かって伸び、鈍重で黒く人氣がない汽船が一隻、黒い煙を吐きながら通り過ぎ、造船所のハンマーの音や遠くの橋を渡る車の騒音がうつろに響いていた。すると突然、鈍い雷の音が遠くから聞こえてきた。

「雷雨が始まりそうだ」と、カリジウス少尉が言った。「稲妻が光り、家々を焼いてくれるに違いない。このかび臭い古い家並みを。野蛮で恐ろしい戦争が勃発し、その鋼鉄のほうきでこの虫食いだらけのぼろを一掃してくれるに違いない。そのとき、生はリフレッシュし、動き出し、健全なものになるんだ。」カリジウス少尉の普段はおとなしく真面目な青い目が、ガラガラと突き刺すように光った。しかし、それから彼はまた落ち着きを取り戻した。「それが一番いいんだ。もうここには何もない。決めたんだ。まだ何を待てるというんだ？ 何もかも僕にはお詠え向きに事が運んでいた。でも結局何一つ実現しなかった。結婚も、家庭も、一体どこへ行ってしまったんだ？ ディッキー、僕が出て行くのが正解なんだよ。」

「俺たちは奴をきつと見つけ出すよ。あの卑劣漢、悪党を」と、ディッキーは言った。

「君たちの親切には感謝するよ。君たちは勇敢だ。でも、君たちはこの先、秩序を生み出すことができるとは思わないか？ 君たちが、君と仲間たちが力を握ったら、状況はきつと変わるだろう。」

「きつと変わると思うよ、カリジウス少尉。あんたがうらやましい。カメルーン、原生林、太陽、黒人や獣、蛇との闘争。」

「待てよ」と、カリジウス少尉は言った。「見苦しくなく死ぬチャンスが得られれば、それで十分なんだ。」

クリスティアン・ルンゲにとって、墓地を散歩し、墓を観察し、碑銘を読み、その下に横たわり、消え去り、忘れ去られた人々の人生を思い描くことほど楽しいことはなかった。十字架がやわらかく輝く穏やかな夕方が最高だった。今日はそれほどの情緒はなく、何か陰鬱なものが垂れ込め、忍び込み、事物はどんよりとした灰色を呈していた。それでルンゲ氏は、観察を中断し、気さくに語る術を心得ているあの墓地の年老いた園丁としばらく雑談しようと思った。

「ここでわしが誰の墓を掘っているか、お分かりですか？

マリー・オルフェルスの墓ですよ。」それから祖父は、あの樹皮葺きの園亭について語り出した。「あそこは恐ろしい場所だ。まず銀行家のリュエデルス、今度は彼女でしょう。ご承知の通り、リュエデルスは首を吊ったんですが、その前に、几帳面なあのお男は、何とまあ、長靴を脱いで、まるで床に就くときのように、それをきちんと揃えて置いたんですよ。オルフェルスは教師で、フランス語の文法書がそばで見つかりました。授業の準備をするために、彼女は市民公園に行ったんでしょうな。本は園亭のベンチの上に開いたままになっていたそうです。次の日、彼女はフランス語の授業に出て来なかったんで、子供たちは大騒ぎしたことでしょうよ。今、彼女の遺体はピエテート葬儀社に安置されていて、明日、ここに埋葬されます。犯人の手がかりはなく、彼女の婚約者、カリジウス少尉が警察を急ぎ立てたんですが、無駄でした。」

祖父はシャベルを肩に載せ、片付けにかかっていた。彼は大きな黄色の麦藁帽子を額からずらした。「ひどく蒸し暑くありませんか？きっと雷雨になりますよ。もう一度雷が鳴りましたからね。子供たちがまだ風をもって中州にいるんです。まあ、今すぐお帰りなさい、さもないとひどい目に遭いますよ。」それから彼は、墓地の壁際の本々や茂みに隠れた道具置き場に歩いて行った。

クリスティアン・ルンゲは、感心し満足したように園丁を見送った。こうした老人たちは、上手に物語る術を心得ている。彼らはいつも細部に忠実で、決してぼやかしたりすることはない。フランス語の文法書か、素晴らしい。彼は手帖を取り出すと、メモし始めた。樹皮葺きの園亭 — 銀行家リュエデルス — 脱ぎ捨てられた長靴 — マリー・オルフェルス — フランス語の文法書 — ピエテート葬儀社 — カリジウス少尉。

「トスカ号では出発しないわね」と、ドーラは言って、食器洗いを中断して探るようにアルベルトの目を覗き込んだ。アルベルトは、両腕を窓台で支えるようにして、陰鬱な目つきで彼女を見つめた。

「ああ、出発しないよ。」

「出発したら、こんなひどい話はないわ。」

「ここに残るよ」と、アルベルトは言うとき、もう一度真剣にドーラの優しい顔を見つめた。「でも、今は行かなくっちゃ。」

「でも、今晚は来るでしょう？」

「ああ、来るよ。」

「八時半に、倉庫のところだね。」

「八時半だね。」

ホルマン夫人は、怒った真っ青な顔をして、台所のドア

のところ立っていた。祖母はちょうど、リナと一緒にラズベリーのマーマレードを作っている最中で、台所中、家中に甘い香りが立ちこめていた。「あれをどこに仕舞ったんですか？」と、ホルマン夫人は尋ねた。祖母は青いエプロンをして、ヴェッグ式殺菌貯蔵瓶にラズベリーを詰め、蓋を押して閉めようとしていた。リナは不安そうにレンジのところからホルマン夫人の方を眺めやった。この顔つきじゃ、一騒動起きるわ。なぜあれを彼女から取り上げなきゃいけないのかしら？「あれ、どこに仕舞ったんです？」祖母は料理鍋の蓋を取り、大きな驚鼻の頭をかしげて中を覗き込んだ。「言わないよ、また返してくれないんだから。」「見せてください」と、ホルマン夫人は言った。「リナ、お母さんがあれをどこに仕舞ったか、知ってるだろ？」「いえ、存じません」と、リナは言った。「嘘を言うんじゃないよ」と、ホルマン夫人は言うとき、台所戸棚のところに行き、鍵の籠を取り出した。「そこにはないよ」と、祖母は言った。「馬鹿な真似はしなさんな。」「どこに仕舞ったんです」と、ホルマン夫人は言うとき、鍵の籠をかかえたまま姿を消した。彼女が家の中で、部屋から部屋へ、階段を下りたり昇ったり、地下室にまで行き来する音が聞こえた。鍵がカチャカチャ音をたて、ホルマン夫人は何かぶつぶつ独り言を言い、愚痴をこぼしていた。

その間、祖母は硬い表情で、新しい貯蔵瓶をラズベリーで満たし、蓋を閉めていた。リナは鬱ぎ込んで庭を眺めた。藪や木々は生気も光彩もなく、死んでいた。ああ、この家では、恐ろしいことにすべてが陰気で重苦しくよそよそしい。いつも死んだ夫のことを考え、毎日毎日開いた戸棚の前に立って、死者の衣服と戸棚の内側に留めた写真に見入る女主人。きつくて強情な年老いた祖母。そして萎縮した小さなマルティン。いやだ、もうここには居たくない、別の勤め口を探そう。

それからホルマン夫人がまた入ってきた。「屋根裏のチェストの鍵はどこなの？」「知らないよ。」「今すぐ鍵をください。」「持ってないよ。」「リナ、鍵はどこにあるの？」「奥様、存じません」と、リナは捨て鉢になって叫んで、祖母の方を向いた。「奥様に鍵をお渡しください。」祖母は怒りに燃えて、リナを陰険に見つめた。「馬鹿だねえ。鍵は渡さないよ。渡すもんか。死人の持ち物だよ。好い加減に正気に立ち戻りなさい。お前を医者に診せたいよ。」それから彼女はいくらか穏やかに、訴えるように言った。「ルイーゼ、思い煩うのはもう好い加減にやめなさい。頭がおかしくなっちゃうよ。」「それじゃ、お母さんは鍵を渡したくないわけ？」「そうさ」と、祖母は言った。「いいわ」と、ホルマン夫人は言うとき、黒目をちらちらさせて台所を見回した。それから斧を見つけると、それを握って出て行った。「何をするつもりなの？」「開けるんですよ」と、ホルマン夫

人は言った。「ちょうどいい鍵がありましたからね。」屋根裏に通じる階段を上る音、斧が木にぶつかる音がして、しばらくすると、ホルマン夫人がまた階段を下りてきた。リナと祖母が戸口に出ると、ホルマン夫人はスーツを腕に掛け、黄色い麦藁帽子と握りが銀の散歩用ステッキを持って、大きな包みを運びおろしていた。彼女は荷物を持って部屋に入り、戸棚の戸がきしむ音がした。祖母は貯蔵瓶を取り、レンジの大きな鍋の方に行き、瓶をブルーベリーのジャムで満たしたが、彼女の年老いた手は震え、煮くずれた果実がいくつか落ちて床にぶつかった。台所中に、甘く重苦しい香りが漂い、はるか遠くからまた雷の音が響いてきた。

ローゼンクランツ通りとパルム通りの角で、メッツラー氏は立ち止まった。彼は黒い帽子をかぶり、彼の顔は蒼白だった。長い間彼はそこに立って、パルム通りを見下ろしていた。彼のいるところからほぼ十軒先に、ピエテート葬儀社があった。大きな白い看板が前庭に突き出ており、そこには「ピエテート葬儀社」と書かれていた。メッツラー氏は看板を見つめたまま、身動きしなかった。それから急に動き出すと、ぎごちなく、自動的に、夢遊病者のように、強制され駆り立てられたようにパルム通りをくぐり、ショーウィンドウに黒い骨壺を飾った白看板の家の前に立った。通りは人気がなく、死んだようだった。どこかの家で下手くそなピアノの音が薄っぺらく鳴っていた。ドアは開いていて、薄暗い廊下に通じていた。メッツラー氏は、ドアを通過して廊下に入った。その廊下からたくさんのドアが分岐し、それぞれのドアの背後には遺体を安置する小部屋があった。いくつかのドアには、その背後に横たわる死者の名前を示すカードが貼られていた。

ピエテート葬儀社の経営者はシュテーンケン夫妻だったが、今は家にいなかった。そもそも家には、小さなハンス・シュテーンケン以外は誰もいなかった。両親は彼に、階下に来た人に注意し手伝いをするように指図していた。ハンス・シュテーンケンはそれをしたことが何度もあったので、不安はなく、すべてに慣れていた。彼は二階の窓際に座って、学校の宿題を仕上げている。そのとき、黒いスーツと山高帽の男が前庭に立ったのが見えた。ハンスは別に不思議に思わなかった。

この家に来る人はみんな、黒い服を着ていたから。だが、その男の顔色には、彼は少し驚いた。それから男が家の中に入るのが見えた。ハンスは立ち上がると、階段を下り、手すりにもたれて身をかがめた。男はあるドアの前に立って聞き耳を立てていた。それから男はドアをゆっくり開け、まず頭を突き出し、部屋に入った。ハンスはこっそりドアのところまで歩いていった。ドアの白い名札には、「マリー・オルフェルス」と書かれていた。ハンスはそのままにはしておけなかった。彼は、ドアの楕円形の覗き穴にかかった小さな黒いカーテンを少し掲げてみた。男は棺のそばに立っていた。彼は山高帽を脱いで、棺の中の死者をまじまじ見下ろしていた。だが、覗き穴を通してなので、彼には死者の足しか見えなかった。黒いストッキングをはいた足が白い肌着から突き出しており、棺の足端には花輪が置かれていた。冷たい電灯が、花輪や黒いストッキングの足、それをまじまじ見つめる男とむき出しの壁に掛かった月桂樹の上で輝いていた。そのときハンス・シュテーンケンは突然、首筋に暖かい吐息を感じて振り向いた。目の前に、堅信礼服を着た死者の兄のヘンリー・オルフェルスが、顔面を蒼白にして立っていた。「何を覗いてるんだ？」と、彼は言った。怒りと非難を込めた顔つきの彼は、自分もガラス窓を覗いてみた。男が腕を上げて死者に話しかけ、彼女に何事か説明しようとしているのが見えた。彼は震える手で目をこすっていた。「あれは誰なんだ？」と、ヘンリーは言った。「分かりません」と、ハンス・シュテーンケンは言った。「知らないはずはあるまい。考えてもごらん、親戚か知り合いだろう。」「知らないんですよ、本当に。」

それからヘンリーはまたガラス窓を覗いた。ハンスは彼に言った。「あの男の人は不安げに、用心深く、そっと入ってきました。まず部屋の中に誰がいるかどうか眺めてましたよ。」「振る舞いが奇妙すぎる。こっちに来なさい。彼が立ち去るまで、しばらくどこかに隠れていよう。でも、彼から目を離さないでおくんだ。感づかれないように。」

「一体、誰なんでしょう？」

「ちょっと来てごらん。どこへ行けばいいんだい？」

「前の帳場に行きましょう。」